

## 東京都における令和4年度のスモン患者検診

中嶋 秀人（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）

小川 克彦（日本大学医学部内科学系神経内科学分野）

川上 途行（慶應大学医学部リハビリテーション医学教室）

菅谷 慶三（東京都立神経病院神経内科）

### 研究要旨

目的：東京都における令和4年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

方法：令和4年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、スモン検診受診患者の現況について検索した。

結果：受診患者数は14人（男性；7人、女性；7人）であった。年齢は13人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、7人が対面で、7人が電話問診であった。発症年は「昭和40～44年」が9人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」が8人と多かった（無回答：5人）。発症年齢は11人が15歳以上であったが、「10-14歳」と「0-4歳」がそれぞれ1人にみられた（無回答：1人）。発症時の視力障害は、障害が目立つ「眼前手動・指数弁」と「全盲」が合わせて5人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が8人と多かった（無回答：1人）。歩行障害は、「不能」が9人と多く、「要介助」・「つかまり歩き」・「不安定独歩」・「一本杖」がそれぞれ1人であった（無回答：1人）。令和4年度では、視力合併症は13人と多く、視力の程度では8人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」状態であり軽症例が多かったが、6人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。下肢筋力低下は9人にみられた（無回答：3人）。歩行障害は、不能例はないが全例にみられ、軽症の「独歩やや不安定」は2人であり、「独歩かなり不安定」～「一本杖」が7人と多かった。「要介助」と「つかまり歩き歩行」は5人であった。外出では、不能例は1人で、「近く／遠くまで一人で可能」が7人であり、「車椅子」～「要介助」は6人であった。「体幹・下肢の表在感覚障害」は10人にみられ、分布では「臍部以下」と「そけい部以下」が合計7人と多かった（無回答：3人）。触覚異常と痛覚異常はともに10人にみられた（無回答：2人）。触覚・痛覚ともに「中等度・高度低下」が合計8人にみられ、「過敏」も2人にみられた。下肢振動覚障害は10人にみられ、高度障害が8人と多かった（無回答：3人）。異常感覚は、「中等度」～「高度」が9人と多く、「軽症」～「ほとんどなし」は4人であった（無回答：1人）。「異常感覚の内容」では、「痛み」が7人と多く、次いで「しめつけ・つっぱり感」が6人にみられた。下肢皮膚温低下は12人、尿失禁は9人にみられた。「初期からの経過」では、軽減が5人であったが、悪化も2人にみられた（無回答：4人）。「10年前からの経過」では、不変が6人と多く、悪化が4人であった（無回答：4人）。身体的合併症は13人にみられ、白内障（10人）が多く、高血圧症（5人）・骨折（7人）・四肢関節疾患（5人）もみられた。障害要因は「スモン＋合併症／加齢」が11人と多かった（無回答：2人）。療養状況では、在宅が11人と多かった。「診察時の重症度」では、中等度が10人と多く、重度・軽度がそれぞれ1人であった。

(無回答：2人)。13人が治療中で、スモンの治療は6人、合併症治療は3人であった。「最近1年の転倒」は7人で、「倒れそう」も4人であった。「一日の生活」では、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が9人で、屋内で主に生活する5人よりも多かった。

結論：発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。令和4年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかったが、一方で、中等度以上の異常感覚が多く例で残存していた。10年間で症状の悪化を呈した例もみられ、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

## A. 研究目的

東京都における令和4年度のスモン検診患者の現況を明らかにする。

## B. 研究方法

令和4年度のスモン検診の集計から得られたデータを分析し、令和4年度におけるスモン検診受診患者の現況について検索した。

## C. 研究結果

### 1. 患者の内訳

受診患者数は14人(男性；7人、女性；7人)であった。年齢は13人が65歳以上の高齢者であった。診察場所は、7人が対面(施設・病院・保健所)で、7人が電話問診であった。

### 2. 発症時の所見

#### (1) 発症年・重症時期

発症年は「昭和40～44年」が9人と目立ち、重症時も、「昭和40～44年」が8人と多かった(無回答：5人)。発症年齢は11人が15歳以上であったが、「10～14歳」が1人、「0～4歳」が1人にみられた(無回答：1人)。

#### (2) 発症時の所見と医療状況

「発症時の視力障害」は、障害が目立つ「全盲」と「眼前手動・指数弁」が合わせて5人であるのに対し、「ほとんど正常」～「軽度低下」が8人と多かった(無回答：1人)。歩行障害は、「不能」が9人と多く、その他「要介助」・「つかまり歩き」・「不安定独歩」・「一本杖」がそれぞれ1人であった(無回答：1人)。「発症後の医療」では、「当初入院後在宅療養」が9人と

多く、「当初より在宅療養」の3人が次いでいた。「入院の繰り返し」と「在宅主体で時々入院」はそれぞれ1人であった。「機能訓練の程度」は「かなりやった」が6人、「少しはやった」が7人で、多くの例で機能訓練が行われており、反対に「ほとんどやっていない」が1人と少数であった。

## 3. 令和4年度の所見

### (1) 臨床所見

体格は、「高度のやせ」はなかったが、「軽度のやせ」が4人、「ふつう」が7人で、「肥満」が3人にみられた。食欲は、「ふつう」が10人と最多で、「やや低下」が3人、「亢進」が1人であった。

視力合併症は13人と多くみられた。「視力の程度」では、8人が「ほとんど正常」～「新聞の細かい字が読める」状態であり軽症例が比較的多かったが、6人は「新聞の大見出しが読める」状態であった。

「上肢の運動障害」は5人にみられた。握力低下は6人にみられた(無回答：7人)。下肢筋力低下は9人にみられた(無回答：3人)。「下肢の痙縮」は4人にみられた(無回答：5人)。下肢筋萎縮は「中等度」が1人、「軽度」が7人であった(無回答：4人)。歩行障害は、不能例はないが全例にみられ、軽症の「独歩やや不安定」は2人であり、「独歩かなり不安定」～「一本杖」が7人と多かった。Romberg徴候は7人にみられた(無回答：7人)。外出では、不能例は1人で、「近く/遠くまで一人で可能」が7人と軽症例が半数であり、「車椅子」～「要介助」は6人であった。

「体幹・下肢の表在感覚障害」は10人にみられ、分布では「臍部以下」と「そけい部以下」が合計7人と多かった(無回答：3人)。触覚異常と痛覚異常はともに8人にみられた(無回答：2人)。触覚・痛覚と

もに「中等度・高度低下」が合計6人にみられ、「過敏」も2人にみられた。下肢振動覚障害は10人にみられ、このうち「高度障害」が8人と多かった（無回答：3人）。異常感覚は、「中等度」～「高度」が9人と多かった。「異常感覚の内容」では、「痛み」が7人と最多で、次いで「しめつけ・つっぱり感」が6人、「じんじん、びりびり感」が5人にみられた。「感覚障害の末梢優位性」は8人にみられた（無回答：4人）。「上肢の感覚異常」は4人にみられた（無回答：3人）。

「膝蓋腱反射の亢進」は4人にみられ（無回答：6人）、Babinski 徴候は2人にみられた（無回答：6人）。「アキレス腱反射の低下～消失」は7人にみられた（無回答：6人）。下肢皮膚温低下は12人、尿失禁は9人にみられた。このうち切迫性尿失禁は4人にみられた。大便失禁は5人にみられた。

胃腸症状は12人にみられた。このうち、「ときどき下痢」は4人にみられ、「常に便秘」と「ときどき便秘」がそれぞれ3人にみられた。「下痢・便秘の交代」も同じく3人にみられた。「しばしば腹痛」は1人にみられた。

## (2) 経過

「初期からの経過」では、「軽減」が5人であったが、「悪化」も2人にみられた（無回答：4人）。「10年前からの経過」では、「不変」は6人と比較的多く、「悪化」が4人であった（無回答：4人）。

## (3) 障害要因・合併症・治療

障害要因は「スモン+合併症/加齢」が11人と多かった（無回答：2人）。療養状況では、在宅が11人と多かった。「診察時の重症度」では、「中等度」が10人と多く、「軽度」が1人であった（無回答：2人）。

身体的合併症は13人にみられ、白内障（10人）が多く、高血圧症（5人）・骨折（7人）・四肢関節疾患（5人）もみられた。脊椎疾患は5人にみられた。脳血管障害は1人にみられた。心疾患は4人、肝胆のう疾患は1人にみられた。「その他消化器疾患」は6人、糖尿病は1人、呼吸器疾患は2人、腎・泌尿器疾患は5人であった。パーキンソン症候を呈している例・「ジスキネジア・動作時また姿勢時の振戦」を呈して

いる例はなかった。悪性腫瘍は2人にみられた。精神症候は12人にみられた。精神症候のうち、「不安・焦燥」は8人にみられ、「心気の状態」も4人にみられた。「記憶力低下」は8人にみられた。「認知症」は2人にみられていた。「受診している診療科」は、神経内科；5人、内科；4人、整形外科；3人であった。「入院中の患者」は2人であった（無回答：12人）。通院中は10人であった（無回答：4人）。

治療は13人で受けており、スモンの治療は6人で、合併症治療は3人であった。治療内容では、注射が1人で、内服薬は9人であった。注射ではビタミン・ガングリオシド・ATP ニコチン酸の注射が行われていたが、「効果あり」の患者はみられなかった。外用薬は4人で使用され、漢方薬は2人で使用されていた。機能訓練は2人で行われていた。「針灸」は1人でのみ行われており、マッサージは1人で受けていた。

## (4) 主な生活状態（介護・介助など）

「最近1年の転倒」は7人にみられ、「倒れそう」も2人であった。「一日の生活」では、「ほとんど毎日外出」～「時々は外出する」が9人で、屋内で主に生活する5人よりも多かった。「食事」は10人が「独立（自立）」して行なっていたが、4人は「一部介助」を要していた。「起き上がり」で介助を要する例は5人で、9人は「自立」であった。「入浴」は8人で介助を必要としていた。「階段昇降」でも、12人で介助を必要としており、うち3人は「全介助」であった。「平地歩行」でも介助を要する例は7人にみられ、このうち2人は全介助であった。「トイレ動作」で介助を要する例は4人であった。「更衣」で介助を要する例は6人であった。「排便」時の要介助例は6人で、「排尿」時の要介助例は10人であった。

「生活の満足度」では、「どちらかという満足・満足」は7人で、「どちらかという不満・不満」は5人であった。「なんともいえない」は2人であった。「怪我をした」例は4人で、「骨折」は2人にみられた。「身体障害者の手帳交付」は全例で受けており、4級；2人、3級；7人、2級；5人、であった。「移動でタクシー代の補助」は11人で受けていた。「介護保険での要介護度」は、要支援2；3人、要介護1；1人、要介

護2;1人、要介護3;1人、であったが、無回答が8人と比較的多かった。「意見書の作成」を行った担当者は、専門医が6人で、日頃の医師が3人であった。「訪問介護」は2人に利用されていた。「訪問入浴介護」は1人でのみ利用されていた。また、「訪問看護」は2人で利用されていた。「訪問リハビリテーション」は利用者はおらず、「以前に利用」が2人に行われていた。「通所リハビリテーション」も1人に利用されていた。「福祉の用具を貸与」されていたのは2人にみられた。「福祉用具の販売」を受けていた例は2人であった。「在宅の改修」を行ったのは1人であった。介護を受ける上での「不安の有無」では、「不安を感じる」例は7人であり、「介護者の高齢化」は5人にみられた。

#### D. 考察

発症時では、視力障害よりも歩行障害の方が目立っていた。

令和4年度では、歩行障害の程度は発症時に比べ改善しており不能例はみられなかったが、程度の差はあるが全例で歩行障害がみられた。また、中等度以上の異常感覚が多くの例で残存していた。10年間で症状の悪化を呈した例もみられ、スモンによる後遺症に加え加齢に伴う併発症が障害要因になっている現状がみられた。

#### E. 結論

1. 令和4年度の東京都におけるスモン検診受診患者の現況を検索した。
2. 現在においても、異常感覚が残存し、歩行障害を呈する例が多くみられた。
3. スモンによる後遺症と加齢による併発症が障害要因になっている現状がみられた。

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし